



# 香葉

## 第10号

通算41号

関東学院女子短期大学

## 香葉会

発行人 山口佳子

代表 横浜市金沢区

六浦東1-50-1

直通・FAX 045-787-0678

E-mail: kouyukai@nifty.com

URL <http://koyokai.shonan.cc>

### お申込み方法

住所・氏名・電話番号(携帯番号)をご記入の上、香葉会事務局へFAX・往復はがき・Eメールにてお申し込み下さい。

- FAX 045-787-0678
- Eメール [kouyukai@nifty.com](mailto:kouyukai@nifty.com)
- 横浜市金沢区六浦東1-50-1 〒236-8503

#### ① 江ノ島散策 ガイド: 山口佳子 (国1回)

日時 10月13日(出) 午前10時~午後1時

集合場所 小田急線片瀬江ノ島駅改札

会費 1,000円(資料・保険等)

\* 荒天の場合は、新江ノ島水族館

申し込み締切 9月30日(日) 必着

#### ② 日本画講習会 講師: 織田明美 (家12回)

日時 11月21日(休) 午前10時~12時

場所 香葉会室

会費 1,000円

持ち物 エプロン・タオル(あれば筆・顔彩)

申し込み締切 11月8日(休)

#### ③ 山手西洋館散策 ガイド: 精木勇先生

日時 12月8日(出) 午前10時(小雨決行)

場所 山手地区

会費 1,000円(資料・保険等)

申し込み締切 11月29日(休)

#### ④ ビーズ講習会 講師: 高石和枝 (国4回)

日時 平成25年1月26日(出)

午後1時~4時

場所 香葉会室

会費 3,000円

持ち物 糸切りばさみ・眼鏡(必要な方)

申し込み締切 12月20日(休)(先着10名)

芸術の秋です。今年はいつもの秋を日本画で表現してみませんか。年賀状に使える画もあります。初心者の方も楽しんで参加して頂けます。

## 2

### 日本画講習会

今年の散策は湘南・江ノ島です。暑い夏が去り、秋風が気持ちいい江ノ島と一緒に散策しませんか? ご家族やお友達を誘ってのご参加お待ちしております。

## 1

### 江ノ島散策

先生のご指導の元、見本をみながらビーズがかもし出す輝きと、さまざまな色を組合せて、一粒一粒さしていく喜びのひと時を、一緒に楽しみませんか。今年は黒ビーズのブローチを作ります。

## 4

### ビーズ講習会

山手にある西洋館を精木勇先生のガイドで巡ります。クリスマス気分を満喫しながら、楽しいひとときを過ごしましょう。

## 3

### 山手西洋館散策

RENEWAL

ホームページを  
リニューアルしました。

ご意見・ご感想をお寄せ下さい。  
<http://koyokai.shonan.cc>

### 「ちょこっとおやつ」

「さくさくわがめ」  
「いわしせんべい」  
各150円です。



人間環境学部人間環境デザイン学科の学生がデザインして繊西久とのコラボレーションで生まれた商品です。大学の購買部で販売しています。

### 香葉賞

関東学院大学 人間環境学部  
デザイン学科 第7期生卒業パーティー



3月24日(休) 新横浜プリンスホテルにて

会長挨拶

山口 佳子 (国1回)



タブロイド版としての「香葉」は、一〇号を迎えました。

同窓会である香葉会は「関東学院女子短期大学」の名前を使うことのできる、唯一の団体です。

昭和二五年(一九五〇年)関東学院短期大学部が三春台に開設されてから六浦校地へ遷り、そして室の木に短大独自の校舎が出来ました。平成十四年(二〇〇二年)人間環境学部への改組までの五〇年余になる歴史を伝える役目を「香葉会」が受け持っていると考えております。改組までの卒業生は二九、二四七名を数えます。

短大は、女子教育に力を注がれた教育の場であり、香葉会は毎年総会の際に社会に活躍する女性を講師として、講演会を開いていました。永井路子、鳥飼玖美子、吉武輝子、増井光子、本田桂子、大庭みな子、大塚野百合といった方々からそれぞれの分野のお話を聞くことができました。今思えば身近にこういった方々からのお話を聞くことができたことを素晴らしい、と思うと同時に講演会を開く計画をなさった先輩のご努力を感謝しております。

さて、改組後には、同窓会は、何か学校の役に立っているでしょうか。短大のころ奨学金を受け取られた方から返金がなされました。それを元に関東学院女子短期大学奨学金を設置いたしました。これは、人間環境学部生に使っていただくことになっていきます。また、優秀な学生に香葉賞を授与していただきたい、とお願ひし、毎年謝恩会の折りにお渡ししています。

人間環境学部では、産学連携による努力が、徐々に結果を出しています。追浜ワイン、クッキーなどです。こういったことに対し支援ができる体制をいつも考えています。

昨年 大学の卒業生が一〇万人を超えました。それを機として、二〇一一年「KGU燦葉フェスティバル」が開催されましたことは、記憶に新しいことです。

今年、室の木校地に看護学部の校舎、短大の付属幼稚園としてスタートした六浦幼稚園が保育園と幼稚園を合体とってよいかと思います。が、「子ども園」が、いま建築中です。

また、関東学院大学、女子短期大学卒業生の子女を対象とした「オリイブ入試」という入試制度もできています。

未来に向けて関東学院の姿を模索する姿勢が、学校のあちらこちらに息づいています。ホームページなどで情報を得て大学にいらしてください。

今回の一〇号には、先日七月に「岡松先生を想う会」を開きましたので、その様子や追悼文を載せています。

子ども園へのあゆみ

藤肥 礼子 (幼14回)

二〇一三年の春、六浦幼稚園は「認定子ども園」として生まれ変わります。新しい一歩を踏み出します。

「認定子ども園」とは幼稚園・保育園のそれぞれの特徴や機能を兼ね合せ、その両方の役割を果たすという新しい仕組みの中で乳幼児期の子どもの達の総合的な教育と保育を提供していく場です。

現在、川沿いの道路横にある敷地に新園舎を建設中。六浦幼稚園はその新しい園舎に移り、キリスト教保育を土台としていく事になりはありませんが、新しい施設の中で就学前の乳幼児の子ども達により良い新しい保育と教育を展開し、更に今の時代の保護者のニーズに出来るべく子育て支援の場として地域に密着した子育てサポートも担う総合的な提供を行っていきます。

新しい施設は保育園・幼稚園のスペースに加え、預かり保育事業のスペース・子育て支援事業の一環として行っている未就園児親子交流の場

「つどいの広場・おりいぶ」・ランチルームや表現活動を活性化させる拠点としてクリエイティブセンターがあります。その他多目的に活用できるスペースも多く保護者交流の場・大学(大学生)との連携の場・地域交流の場としても活用していきます。

新園舎の建設が進む中、私達保育者は色々な方々の声に耳を傾けながら子ども達に良い保育を展開していく事が出来るように考え、学び、試行錯誤しながら話し合う日々です。これから始まる新しい歩みに不安はありますが、多くの方から「愛される子ども園」として成長していく事が出来るように神様に祈り求めながら研鑽を積んでいきたいと思ひます。(関東学院六浦幼稚園教諭)

燦葉会 支部会 御案内

毎年、香葉会と合同で行っています。

◎湘南支部

日時 2012年9月2日(日)

午後4時

場所 グランドホテル湘南(藤沢)

◎西湘支部

日時 2012年9月8日(土)

午後1時

場所 小田原キャンパス

◎県央支部

日時 2012年11月17日(土)

午後6時

場所 本厚木南口「上海菜館」



## こころは、あなたの手のひら

中村 啓子 (国1回)



今年(二〇一二年)六月七日、関東学院大学ベネットホール。宗教教育センターからお招きを受け

た私は、ここで「星野富弘 人と詩の世界」というタイトルの朗読講演をさせていただきました。  
一九六八年、短大国文科を卒業した私にとって、実に五四年ぶりの母校訪問です。開催直前に、親しかったクラスメイトから手紙が届きました。「母校のキリスト教講演会での啓子さんの朗読：夢のようですね」「夢のよう」その言葉から、短大時代から今日までの自分の歩みが、さざ波のように広がって見えて来るのを覚えた私です。

「アナウンサーになりたい」と言い続ける私の夢は、地元出身のクラスメイトの目には、あまりにも大きすぎたことでしょう。なぜなら、ここあるごとに私のアクセントの違いを指摘しなければならなかったのですから。

でも、私にとっては、地元の学生が多いことと、優れた教授陣による少人数での国文科授業は、言葉を学ぶ上での何よりの糧となりました。放送局のアナウンサーへの道は、

閉ざされたものの、卒業後、ナレーター事務所所属した私は、番組、CM、そしてNTTの声(時報、ドコモの留守番電話センター他)など、多くの方に声をお聞きいただくようになり、それは今も続いています。

局アナ試験に落ちたこと、途中で病に臥したこと、さまざまな出来事が、今にして思えば、私にとっての好機でした。

四六歳でクリスチャンになった私は、今、同じ信仰に立ち「愛する事、生きる事」を語り続ける「三浦綾子」と「星野富弘」の作品を、ひとりでも多くの方に伝えたいと、朗読活動に力を注いでいます。

その朗読を、母校の後輩達にもお聞きいただけたらと：まさしく夢のような出来事です。

緑輝くキャンパスに足を踏み入れたとき、私には、こんな素晴らしい環境で過ごした青春時代があったのだ！と息も止まるような感動に包まれたことでした。

建ち並ぶ近代建築の学び舎の中でもひとときわどしりとその風格を誇るS.C.C.館。その四階にあるベネットホール。そこに集った約二五〇名の学生達と、一般の方五〇名前にバイオリンの音が流れ、静かに語り始めたとき、ここに育ち、ここに戻って来た喜びが、星野富弘さんのよるこびの詩と重なり、私の胸に満ち満ちたことでした。

「立っただけでも 倒れても ここは あなたの手のひら」

この日、エンディングに読んだ「カトレア」という詩です。

## 海外通信

## 「アメリカ生活の一面」

澤野 洋子 (英11回)



主人の引退に伴い、シアトルに再移住して二年目を迎えました。

先日友人が亡くなり、土曜日の正午から行われた葬儀に出席し、日本の前夜式、告別式と二日行う習慣とは余りにも違ったので、ご紹介します。

教会の玄関では遺族が参列者一人一人を出迎えて挨拶をし、受付では、故人の写真入プログラムが配られました。聖壇には遺体を運び込まず、花で飾った写真もありませんでした。故人は八三歳でしたが牧師も遺族も度々「セレブレーション」という言葉を使いました。故人の生前における人生を「祝う」と訳すと違和感がありますが「覚えて感謝し、称える」と言う意味でしょう。大型スクリーンに映された数十枚の写真と共に、思い出を語ったのは三人の子供と、会場から次々手を挙げたスピーチ希望者たちでした。短く一言の人もいれば、長々と語る人もいて、故人の人格、信仰、社会貢献、そしていかに家族を愛したかが偲ばれました。献花なしで二時間近くかかり、隣人に「長かったわね」と感想を述べたら「今日はまだ短い方よ、三時

間以上の葬儀もあるわよ」と聞き驚いた次第です。お茶のもてなしがあり、私は遠慮しましたが親族と、希望者は墓地に直行して埋葬し、一日で葬儀を終えるとのことでした。

話を換えます。シアトルと言えばボーイング、スターバックス、マリナーズ、マイクロソフトが有名ですが、戦前、戦後日本人が持ち込み、この地で育て上げた誇り高い「日本ブランド」が沢山あります。小粒の牡蠣、あさり、ふじりんご、豆腐、しいたけ、菜っ葉、さつまいもなど現在、人種を問わず誰でも好む食材となっています。又、深紅色の葉が繊細なレースのようで、枝がだれて丸みを帯びた姿に成長するジャパニーズ・メイプル(イロハモミジ)も大変人気があり、人目につく玄関先に植えられているのをよく見かけます。ペットにも、サムライ、ベンケイ、ヒメ、アズキ、キナコ、マメなどの名をつけている人もいます。

このように日本のものが一般社会に受け入れられている背景には、品質の良さと共に、移民してきた日本人が戦前、戦後迫害に耐え、誠実に働いてアメリカ社会に貢献し、信頼を得て来た長い歴史の結果であることをお伝えしたいと思います。





## 岡松和夫先生を想う会

岡松和夫先生は平成24年1月21日にご逝去されました。ご冥福をお祈り致します。

7月8日(日)11時より鎌倉の鶴ヶ岡会館にて岡松先生の奥様・お嬢様を迎え、先生を想う会を開催致しました。関東学院女子短期大学時代の先生や職員・鎌倉ペンクラブの方々・多くの卒業生と共に先生を想い、歓談致しました。懐かしい写真に一同、当時を思い出しました。



### 岡松和夫先生を想う

桑川 光樹

(元関東学院女子短期大学教員)



岡松先生は、本年一月鎌倉の病院で亡くなった。葬儀は鎌倉市内の「湘和礼殯館」で、

近親者のみで行われたが、親族ではない私も、特別に同席させていた。読経もなく歌もなくひたすら花に埋もれて清楚かつ荘厳であった。その式は、いかにも岡松先生らしかった。来る七月八日には「岡松和夫先生を想う会」が催される。ただ、私の場合、彼を「先生」と呼ぶには多少の違和感がある。学生時代以来の友人であり、長く同人雑誌『古典と現代』の仲間として、「おい、岡松」などと呼び捨てにして来た仲であるから、やはりここでも「岡松君」と親しげに呼ばせてもらおう。一人は、時に前後して先輩でもあり後輩でもあった。関東学院の教員室では、先生の彼が上司であった。共に定年を迎え、同人雑誌も七〇号で廃刊になった最近では、鎌倉駅近くの店で時折一緒にビールを飲み、昼食を食べ、コーヒー屋に席を移して長時間しゃべり合うのが、お互いの楽しみだった。

誰もが知るように、岡松和夫は小

説家である。芥川賞を受けた『志賀島』をはじめ、滋味豊かな佳篇を多く残した。そこには共通して、ある特徴的な表現が、やや頻繁に用いられていることに、人は容易に気付くであろう。「らしかった」または「ようだった」というのがそれである。例えば、「泉は顔を動かさなかった。見まいと思っっているらしかった」(峠の棲家)、「白木原は石室のもつ独特の雰囲気を話したらしかなかった」(少年飛行兵の絵)、などなど。ここには三つの性格が認められる。すなわち、第一に、対象に溺れない傍観者の姿勢。第二に、対象の深奥を憶測する主観性。第三に、断定を避けた朦朧性とその抒情性である。これらは相矛盾するようでありながら、質高く融合して、作家・岡松和夫の複眼を形成していた。そしてそれがまた、人間・岡松の人柄でもあった。傍観者といっても、対象への興味が淡いではなかった。むしろ熾烈な方だった。憶測といっても、邪推はなかった。常に対象に寄り添い許す慈愛があった。そして、朦朧といっても、書くことに韜晦やごまかしは無かった。核心を衝いて的確であった。

今度の「岡松和夫先生を想う会」でも、私はこの「らしかった論」を皆さんに聞いていただこうと思っっている。今も私の胸中に温顔のまま生きている岡松君は、苦笑しながら頷いてくれるのではないだろうか。

明治学院大学名誉教授





語らざれば、愁い無きに似たり—岡松先生のこと—

岩佐 壮四郎

(元関東学院女子短期大学教員)



■岡松先生に最後にお会いしたのは、昨年の今頃、五月の末の頃である。大学の職員をし

ている国文科の卒業生を中心に、自然発生的に、先生を囲む会を茅ヶ崎で開くことになった。小津安二郎監督が、映画の構想を練るために定宿にしていたという会場の茅ヶ崎館には、近くにお住いの香葉会会長の山口さんもおみえになった。教え子をはじめ、何人かの旧職員も含めた気のおけない人たちのなかで先生も楽しそうだった。その後、しばらくして入院なさるなどは、誰も思わなかっただろう。夏にメキシコに行き、学校が始まると野暮用にかまけて、電話の一本も差し上げることなかった自分の迂闊が悔やまれてならない。■はじめてお会いしたのは、山口の大学から、杉野先生の後任として短大に転じることになり、学科長としての先生の面接を受けたときである。先生はまだ四十代、芥川賞を受賞なさって数年経った頃で、作家としても多忙だった。小説、エッセイ、書評、座談会と殆ど毎月のよ

うに、新聞の広告に岡松和夫という名前が載った。また、国文学の世界でも、一休の研究者として知られ、「狂雲集」についての独自の解釈は仏教文学の分野では高く評価されはじめていた。十年ほどして、学科長のバトンがわたしが引き継ぐことになったが、ブラジルに赴かれた一年間ほどは休職なさったものの、多忙を理由に休まれるなどということとはなかった。「大臣貴紳に近づかず」という道元の言葉をモットーに、人の上に立つたり、権力に阿るなどということには嫌いだっただが、短大の将来に無関心であるというようなこともなかった。しかし、作家と教員の二足のわらじを、両方とも手を抜かず履きとおすためには、相当の無理もなさったのではないかとも思われる。完全退職なさる日、帰りの車のなかで、やり通したという満足感がありますよ、とおっしゃった言葉は耳に残っているが、学校に出る前日はいつも緊張して、睡眠薬を飲んでいらつしゃったという奥様の言葉をお聞きして、改めて、先生の仕事に対する向き合い方に、思いを馳せずにはいられなかった。■「君看よ双眼の色／語らざれば愁い無きに似たり」と、これは、短大を退職なさるとき、国文科の専任教員一同に下さった色紙の言葉。白隠の語録にあり、芥川好んだこの語が、水茎あざやかな楷書で書かれている。この言葉を想起しながら、先生の著書、もう一度、ゆっくりと披いてみたいと思っている。 関東学院大学教授

悼岡松和夫先生

内藤 明

(元関東学院女子短期大学教員)



一九八五年から五年間、関東学院女子短期大学でお世話になりました。

- 受話器より人の死は来ぬ訥々と語る言葉が胡座居て聞く
  - 移り来し崖の下なるわが部屋に寄りて黙せり岡松和夫
  - 先生はパン食なりき昼時を語りて愉し国文研究室
  - その声が何でこんなに残れるや海辺の町の記憶をたどる
  - なかつ川の品書き見つつ正秋の着物を語りたまひき
  - やはらかき声にひとすぢ混じりある怒りのごときかなしみの声
  - 泡とふ時代がありぬなぞらに鳴きて動かぬ鳶を見てるき
  - 古き壺ふたつを並べ欲しき方選ばせたまひし鎌倉の店
- 〔音〕2012・5月号他)
- 早稲田大学社会科学部・同大学院教授

## 思い出

竹中 恭子 (国13回)

岡松和夫先生が一月二一日に亡くなられました。八〇才でした。芥川賞作家でありながら謙虚で穏やかな方でした。

私が短大の国文科に在籍していた一〇代の頃、先生はとても教育熱心。「作文」の授業では、毎回凄い枚数の宿題が出て苦勞しました。私はそれまでそんなに長い文章を書いたことがなかったので苦闘の連続で、句読点を増やしたり修飾語を延々と並べてみたり。もちろん、そんなことでは何千字もの字数を埋めることができるわけもなくさんざん悩み、書き直し：結果、幼いながらも「構成」というものを考えるようになりました。

そうなのです。文章は構成がキチンとしていけば長くても短くても読ませるものを書くことが出来るのです。それがのちにライターになってから（特に新聞記事を書く際に）どんなに役にたったか、知れませんが、当時、何も知らない私に文章を書くコツを教えてくださいました。それが岡松先生でした。先生のおかげで私は文章のプロとして仕事することができたと言っても過言ではないでしょう。学生時代は横須賀線で一緒に帰ることが多かったのですが、卒業してからは研究室をお訪ねしたり、結婚式にご出席いただいたり。近年は、鎌倉ペンクラブの会長をつとめられていたので、会の帰りに二人で喫茶店

に寄らせていただくことが多かったです。「君は一日に何枚書くの？僕は一〇枚が限度だよ。色々な分野に興味をもつのも良いことだけれど同じことを何度も書くのは、悪いことではないんだ。大切なことなのかもしれないんだよ」そう、おっしゃっていました。「それから、自分を褒めてくれる評論家の言葉を大事にした方がいい」まるで同じプロの小説家に対するかのように色々なお話をしてくださいました。

いちばん印象にあるのはじつと私の目を覗き込んで「今日、ぼくは君に大切なことを三つ、言ったんだよ。何を言ったのか、言ってごらんさ」と、言われたこと。教えるだけではなく、それを復唱させる態度に教育者としての先生の、誠実なお人柄を見た思いがしました。

私が「小説は自分と向き合わなくてはいけないのがとても辛いです。先生は本当に血がにじむような努力でご自分と向き合って書いていらしたのがわかりました。私はそれが嫌で逃げてきた気がします」とお伝えすると「今からだから書けるかもしれないよ。書きなさい。持ってきてさい。」と。

私は昨年お会いしてそう言われたにもかかわらず今書いている作品を仕上げるが出来ず先生の命が消える前に読んでいただくことが出来ないままでした。

もうひとつ、忘れられないのは、短大卒業のとき、書いていただいたご本のサインの横にある、私へのメッセージ。「まだ、聞こえない足音に

耳を澄ましている。」先生、今までありがとうございました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 「岡松先生との思い出」

鈴木 幸子 (国5回)

先日は、「岡松和夫先生を想う会」に出席させていただきありがとうございました。ございました。

岡松先生がお亡くなりになったことは、新聞記事で知ったのですが、突然のことだったので、私の中の悲しさをどうしたら良いのだろうと思っております。

今回、懐かしい皆様方、岡松先生の御家族・御友人の方々と御一緒に、先生のことを偲ぶ会に集えて大変うれしく感じました。

御葬儀の時の糸川先生のスケッチが殊に印象的でした。

会場では、ずっと心が溶けていく感じがして、次々と短大時代の先生との思い出が浮かんで来ました。

まず、岡松先生の授業は、私にはとても面白くて、楽しみだったということ——唐木順三や小林秀雄など短大の国文科ではこういうことを学べるんだということ。とにかく先生の講義はとても魅力的でした。

短大一年の時、江藤淳さんの『漱石とその時代I』が出て、評判になっていました。「国文研究会」に入っていた私は、先生からその本を手渡され、「国文科の雑誌に掲載するので」これを読んで、要点をまとめて

ください。」と言われた時には緊張しました。「あっ、特に大切なところはね……。」と先生は、そこにあった紙をピツとさいて、ささっとペー지를開けて、しおりになさいました。(当時、今の便利な付箋紙はなかった)その手際の良さ、本を心から愛していらつしやるんだな、とつくづく感じました。

いつもにっこりしていらして、「こういう時にはどの本が良い。」とか、いろいろ適切な御指導を受けることが出来ました。

「あの作家はね……。」国文演習室などでの先生とのおしゃべりも楽しかったです。

こんなこともありました。(これは在学中だったか、卒業した直ぐ後だったか)茶道の先生や友人達と鎌倉散策の折、「私の短大の岡松先生は、小説も書いていらして……。」と話しておりましたら、源氏山のところで、小さかったお嬢様と御一緒に岡松先生にバツタリお会いして、びつくりしたこともありました。当時のお散歩コースだったのでしょか？

そうそう、随分後だったと思いますが、ブラジルに行かれた時には、先生の壮行会を開いたことも覚えて

います。

その時々が、本当に楽しい思い出でした。思い出の中の先生は、いつもにっこりと優しくほほ笑んでいらつしやいます。私の心の中にとっかかりと焼きついていきます。

先生の御本をもう一度読んでみたいと思います。

岡松先生ありがとうございました。



## 金沢八景散策に参加して

原田 玉枝 (家28回)



三十年ぶりの金沢八景は、あの頃のままの変わらない景観で私を迎えてく

れました。毎年、「香葉」を手にしなが

ら、中々短大へ出向くチャンスに恵ま

れず、お世話になった先生方や友人達を思いつつ、三二年の歳月が流れました。

初めてお会いする先輩方と、金沢八景散策が一〇時にスタート、伊藤博文公ゆかりの場へ所々立ち寄り、説明を受けながら、学生時代に暮らした街並を、なつかしい思いを胸に、皆で歩き、潮の香とともに野島へ到着。

当時の材料をほぼそのまま復元された旧伊藤博文金沢別邸では、東京湾をながめながら、とても興味深い説明を受け、いろいろなエピソードを混じえたお話は、まるでその時代にいるかのように、激動の明治の風の中に引き込まれてゆく自分を感じた、ひと時でした。

野島から夕照橋を渡り、かつて学

寮のあった、なつかしい室の木校地へ。

お世話になった亡き、下田哲先生のオリーブの木は、たくさんの実を結び、「初めてであり、終りである」の聖句と先生直筆のお言葉「知識も進みて敬虔深かれ、こころの緒琴の調べも高かれ」を、かみしめ、感謝の気持ちであふれました。

翌日、私の集う潮来教会の聖日礼拝で、聖書の箇所は、黙示録二二章、まさに、「初めてであり、終りである。」の説教でした。不思議な導きと、いつも私たちを見守って下さる御方の恵と祝福を実感し、心から感謝のひとときでした。

## 山手西洋館散策に参加して

高橋 咲子 (英6回)



一昨年、卒業以来五十余年ぶりに香葉会の催しに日本画講座・山手西洋館散策と足腰の丈夫なうちにはと思い参加致しました。

今回は二回目です。冬晴れの暖かい十二月十日(土)

参加者三十三名の人たちと共に港の見える丘公園より出発致しました。

短大の卒業の方たちと年代を越え、なつかしくすぐ親しくうちとけ心は学生時代にもどってウキウキと語り合い楽しい時を過ごすことが出来ました。

毎年各館の展示も趣向をこらして期待がたかまります。今回は少しさびしいところもあり、東日本大震災の影響のためでしょうかと感じました。

特筆すべきことは、一八八四年十月六日に関東学院の源流の横浜バプテスト神学校発祥の地に二〇〇九年十月創立百二十五周年の記念として横浜山手七十五番地に設立された記念碑を見学出来ましたことです。

現在は、住宅の一画に建立しております。

又、楽しみにしておりましたカトリック山手教会の聖堂が結婚式の会場のため見学出来ませんでしたことが残念でした。

しかし、行事がなければ土曜日と日曜日は開放されており、何時でも見学出来るそうです。

帰路には、初めてお会いした友四人で、おいしい中華の昼食をいただきました。心も体も暖かくなって家路につきました。

今年の香葉会の企画を楽しみに致しております。

皆さまも是非参加なさることを願っております。



## 関東学院大学生涯学習センター

所長 中原 功二郎

関東学院大学生涯学習センターは、本学の有する人材、施設を活用し、「開かれた大学」として、年間八〇〇九〇の公開講座と二〇以上の資格講座を開講しています。

公開講座では、本学の建学の精神に基づくものから、語学、パソコン、教養、スポーツ、くらしと社会、建築、郷土史まで、さまざまな分野を学ぶことができます。また、語学、旅行業務、簿記、ファイナンシャルプランナー、秘書実務、建築など様々な資格取得のための支援を行っています。公務員試験、教員採用試験などへの対策講座も開講しています。

本学の学生、卒業生、保護者の皆様、地域の皆様、どなたでも自由に受講できます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## 編集後記

タブロイド版になって早十年目をむかえた我が「香葉」。編集委員を増員して、夏の暑さにも負けず、頑張った第十号です。母校の香りを感じていただけたら幸いです。

そして快くご協力をしていただいた皆様には心より感謝いたします。又、ホームページをリニューアルしたので大いに活用し、香葉会を身近に感じてもらえたらと思います。香葉会はいつも、あなた、のそばにいます。

皆様のご意見・ご感想など委員一同お待ちしております。(お)

